

青梅市文化財ニュース

第264号

平成21年10月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 TEL0428-23-6859）

新嘗祭と神嘗祭

10月の初・中旬頃は青梅市内のあちこちで稲刈りが行われる頃です。青梅市域で一番の穀倉地帯は霞川流域と友田の片砂付近ですが、どちらかといえば畑作が多い地域ですので、コンバインで稲刈りをし、乾燥庫あるいは乾燥機で乾燥させるような大規模稲作農家は皆無であるものと思われます。刈った稲は「はさ20日」と言われるように2～3週間「稲掛け」で天然乾燥した後脱穀をします。青梅あたりでは、10月中旬から11月初めにかけて粳になり、粳すり・精米をして「新米」となります。

この新米がとれたことを感謝して神様に捧げるお祈りが「^{にいなめさい}新嘗祭」です。つまり、新嘗祭とは収穫感謝祭のことで、現在では、11月23日を「勤労感謝の日」としてお祝いし、祭日としています。

この「新嘗祭」ですが、『日本書紀』の仁徳天皇40年に、「是歳、新嘗の月に当たりて、宴会（とよのあかり）の日を以て、酒（おおみき）を内外命婦等（ひめとねたち）に賜ふ」と載っているそうです。また、これ以前の神代巻にも「新嘗」の語は出てくるようで、かなり古くから行われてきたものと推察されます。これは、稲作農耕とともに始まった行事であろうと思われます。

「新嘗祭」は、元々は11月の下の卯の日、卯の日が3回ある年は中の卯の日に行われていました。明治になり、今の太陽暦にあらためる際（明治5年12月3日をもって明治6年1月1日として太陽暦に変更した）明治6年11月23日が下卯日であったため、この日が新嘗祭に定められたという経緯があります。そして昭和23年に、国民の祝日に関する法律により、農業だけではなく工業・商業等すべての勤労に感謝する日ということで「勤労感謝の日」という名称になって現在に至っています。

「^{かんなめさい}神嘗祭」は、伊勢の神宮において皇祖天照大御神に新穀を奉る祭りを言い、神宮で一年を通して一番重要な祭祀となっています。外宮（^{とようけだいじんぐう}豊受大神宮）では、^{ゆきのゆうべのおおみけ}由貴夕大御饌（10月15日午後10時）、^{ゆきのあしたのおおみけ}由貴朝大御饌（16日午前2時）、奉幣（16日正午）、御神楽（16日午後6時）、という日程で行われ、内宮（皇大神宮）では、ちょうど一日遅れで同じ行事が行われます。

両正宮に引き続いて、10月25日まで、14の別宮をはじめ109社の^{せつまつしゃ}摂末社に至るまですべての社で神嘗祭が行われます。

^{ゆきのおおみけ}由貴大御饌とはもともと^{しんせん}神聖な神饌で、^{みじょうくでん}宇治の御常供田で収穫した初穂を奉獻します。^{ゆきのおおみけ}由貴大御饌は、祭主以下大小宮司をはじめ全神職が奉仕します。午後8時、第一鼓。午後9時、第二鼓。退出は午後12時となります。天皇より奉られる^{へいはく}幣帛を捧げた勅使が参拝します。幣帛を奉り勅使御祭文を奏し、大宮司が^{のりと}祝詞を奏し、御祭文及び幣帛を殿内にお納めし、勅使以下が大玉串を奉って八度拝を行って儀式は終了します。

神嘗祭でまず皇大御神がお初穂を召し上がり、その残りを天皇が聞こし召される。それが神嘗祭に引き続いて宮中で行う新嘗祭の趣意だと考えられています。

今年は大きな台風が一つ上陸しましたが、青梅市域では大きな被害はなく、お米はそこそこの収穫が見込めるようです。食糧自給率が40パーセントなどと言われている日本にとって唯一100パーセントの自給率を保っているのが日本の主食であるお米です。

11月23日の勤労感謝の日には、健康で毎日食べ物を戴くことが出来ることに感謝するとともに、「食」のことについて考えて見るのも悪くはないと思います。

参考文献 太陽出版社 「日本の神々」

(文責 神森 正)